



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道における縄文時代の墓と社会 [全文の要約]
Author(s)	藤原, 秀樹
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16492号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95177
Type	doctoral thesis
File Information	Hideki_Fujiwara_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 藤原秀樹

学位論文題名

北海道における縄文時代の墓と社会

本論文の目的は、北海道における縄文時代の墓を巡る行為の諸痕跡を多角的に検討し、墓からみた縄文時代の社会に迫ることである。

第Ⅰ部では研究の目的を記載し、葬墓制の定義、時間軸・空間軸の設定、埋葬方法・墓の分類を行った後、北海道における縄文時代葬墓制の研究史をまとめた。

第1章では墓の差異から縄文時代の社会を復元したこれまでの研究が検討を行いやすい一部時期・遺跡を取り上げているという問題点を指摘した上で、北海道における縄文時代の個別の墓やまとまりとしての墓の様相等の基礎的資料を集成して、通時的・地域的な特徴を明らかにし、北海道の縄文時代の墓と社会について、初めての包括的な研究を目指すことを目的とした。

更に、「葬墓制」を死の発生から生者による死の受け入れと日常生活への復帰という一定期間持続する死の過程のうち、考古学的に認識可能な選地や規模・形状、まとまり等も含む墓の造営、遺体の処理方法、遺体の安置と副葬品等の選択やベンガラ散布、墓標の有無や材質・形状等の選択、埋葬前後に行われた何らかの行為の痕跡を残す儀礼等と定義した上で、基礎となる土器編年による時間軸、北海道の地域区分を設定し、遺体処理方法・埋葬回数・埋葬姿勢・墓のまとまりと分割等を分類した。

第2章では北海道における縄文時代葬墓制の研究史をまとめ、4つの問題点を指摘し、その克服のために、第Ⅱ部以降で早期から晩期までを通した北海道各地の土坑墓や多様な埋葬方法、副葬品や被葬者について、集成を基本とする悉皆的・総合的な考察を加えその特徴や画期を明確化し、墓から見た縄文社会の実像に迫ることが可能となる後期・晩期に焦点をあて検討を進めることを示した。

4つの問題点とは次のとおりである。

1. これまでの葬墓制の研究は後期・晩期を中心としたもの、地域・時期等を限定した個別研究が多く、北海道全体を俯瞰する集成や総合的な考察が殆ど無い
2. 副葬品と被葬者の年齢・性別等の関係が検証されていない
3. 埋葬前後に墓地で行われたモノを用いた行為の痕跡から窺われる埋葬儀礼についての言及が少ない
4. 縄文社会を復元する研究も後期の周堤墓やその直後、晩期の副葬品が多い多数の土坑墓等の特徴的な墓や特定の時期等の検討を行いやすい一部の資料のみを重視してきた

第Ⅱ部では縄文時代の墓の中心となる土坑墓、副葬品と被葬者の関係、副葬品の出土位置をまとめた後、土坑墓以外の多様な埋葬方法や焼人骨葬等の特異な遺骸処理方法、後期の大規模な環状列石や環状列石墓・配石墓について検討した。

第3章では土坑墓を中心として、時期別・地域別の概要をまとめて特徴を示し、土坑墓の掘削方法も平面形により大きく2分されることが判明した。

その上で、北海道における縄文時代の葬墓制の画期は、多様な埋葬方法が終焉し、居住域と離れた墓地が形成され、更に埋葬小群に分割可能な例もあり、副葬品が増加し、副葬率も高くなる後期中葉とした。東北・関東とも比較した結果、北海道の副葬率は縄文時代を通して東北・関東よりも高いか同等で、北海道は葬墓制の検討から社会の復元を目指すことが相対的に可能な地域とした。

次に副葬品について検討した。副葬品と被葬者との関係について、性別・年齢ともに判明した

人骨検出例から検討した結果、副葬品は各時期の生業・職能や性的分業と密接に関連していると考えた。

また、遠隔地から運ばれることから稀少性を有しているヒスイの副葬について検討した結果、後期中葉にヒスイの副葬が増加し、後期後葉に継続するが、三ッ谷式期を境に小型化し、蛇紋岩・滑石等の石材が用いられるようになる。晩期では地域的な差が見られ、青森県の影響を受けたと考えた。

副葬品の出土位置は、剥片石器類等の埋葬者が開口部から被葬者の頭部付近に投げ込んだもの、石斧・石棒・弓の実際の使用を想定したもの、漆製品・サメ歯等の埋葬時に装着されていたものに分かれることが判明した。

第4章では貯蔵穴への埋葬、貝塚等への埋葬、土器埋設遺構等の多様な埋葬方法について検討した。

貯蔵穴への埋葬は、北海道では前期中葉が最も古く、後葉に増加し、中期まで散見されるが、明瞭な副葬品はほとんど無いことから、人骨未検出でも特別な出土状況を示さない埋葬が多いと推測した。

貝塚・盛土遺構等への埋葬は、北海道では前期中葉が最も古く、前期・中期は道南部、後期前葉は道南部・道東部にあり、北東北も前期・中期と後期・晩期にある。住居への埋葬は北海道では前期・中期が道南部中心で道央部・道東部に少数、後期・晩期は道南部に少数ある。北東北も同時期にあり、円筒土器文化圏・亀ヶ岡文化圏で共通する埋葬方法であった。

土器埋設遺構は、北海道では前期中葉が古く、後葉に増加し、中期後葉・後期前葉は成人再葬も出現する。その出現・終焉や埋設形態等は北東北、特に青森県の影響を大きく受けている。一方で、晩期の道央部、晩期末葉～続縄文前半期の日高地方・道東部の土器埋設遺構は道南部・北東北と差異があることから、独自に発達したと考えた。その性格は新生児～幼児等埋葬、成人再葬の他に、祭祀での使用もあり時期により差異がある。

焼人骨葬は人骨検出例、焼人骨葬の可能性がある土坑墓坑底部等被熱例、土坑墓内炭化材・焼土等検出例も含めて、北海道では前期～後期でも行われたが散発的で、晩期の道央部～道東部・道北部では土坑墓の埋め戻し途中や遺体上面で火を焚いた埋葬儀礼に伴う焼人骨葬が広く行われた。北東北は後期の土坑墓外火葬が中心であり、道南部に確実な事例が無いことから、北海道の焼人骨葬は晩期の道央部～道東北部において独自に発達したと考えた。

後期の環状列石や配石墓等は、大規模環状列石が直径 30m以上の環状に礫を配置した後期前葉・中葉のもので墓の有無があり、環状列石は墓を伴わず 10 数m以下の環状に礫を配置した後期のもの、配石遺構は各時期の墓を伴わず環状を除く様々な形態に礫を配置したもの、配石墓は土坑墓上に 1～数個程度の礫が置かれたもの、環状列石墓・配石墓は後期中葉の土坑墓上に直径 1～2m程度の小型の円形配石のあるものや各種の配石墓及び坑口部周囲に 10m以下の立石が巡り中央に礫敷き土坑のある墓、と定義した。

このうち、後期前葉に北海道の津軽海峡域東部～噴火湾沿岸の太平洋側に分布する大規模環状列石は主に小牧野遺跡・伊勢堂岱遺跡の影響、津軽海峡域西部～道南部の日本海側に分布する小型円形の配石遺構は主に大湯環状列石の影響を受けて構築されたが、北海道独自の要素も認められるなど、複雑な様相を示している。後期中葉の環状列石墓・配石墓は矢吹分類を参考に、新規報告例を加えてⅠ群～Ⅵ群に細分し、地域的特徴も併せて一部重複しながら、Ⅰ群→Ⅵ群へ変遷したと考えた。

最後に、北海道における葬墓制の特色について多様な埋葬方法の併存や墓地の成立、副葬品の変遷等からまとめ、後期中葉以降の居住域から離れた墓地の成立と分割可能な埋葬小群の明確化、埋葬方法の多様性喪失は相対的に埋葬方法が規格化されたと評価でき、埋葬小群や副葬品、被葬者の血縁関係・系譜や社会的地位、世帯等の社会的単位等を基礎とした埋葬基準が広く認知され、埋葬方法を規制したと考えた。

第Ⅲ部では北海道の縄文時代を代表する墓である周堤墓を取り上げ、分布や編年を明らかにするとともに、周堤墓内土坑墓を埋葬小群に分割し、その社会的背景について論じた。

第5章では周堤墓を規模によりⅠ群～Ⅴ群に分類し、成立と変遷について検討した結果、周堤墓は石狩低地帯南部の千歳市キウスもしくはその周辺で発生し、次第に規模が大型化して掘り込みが深く周堤も明瞭となり、土坑墓数が増加する傾向がある。この規模拡大に伴い、埋葬儀礼に関わる竪穴内遺物、副葬品、墓標、埋め方等の規制は次第に強化された。

第6章では周堤墓の成立と終焉について検討した。後期後葉の動物遺存体の検出状況とアルケノン水温の分析からサケ科魚類が多く回帰したと推測される状況に適応して、河川漁撈を主な生業とし、その集中的な捕獲・加工作業のための集住・共同作業を背景として大規模な盛土遺構での祭祀が発展し、世帯あるいは複数世帯の紐帯が強化される中で周堤墓が構築されたと考えた。

周堤墓の終焉は後期後葉の社会変化に要因があると考え、周堤による区画であらわされる複数世帯(＝ムラ)よりも広い範囲、より上級の社会的単位での紐帯強化が、区画の意味を失わせ、周堤墓の終焉へ繋がったと推測した。

周堤墓内土坑墓は出入口に直交する列状配置が基本で、規模拡大に比例して1→4列と増え、1列の土坑墓配置が一世帯に相当すると推測した。また、周堤墓の1群～5群を第1～5期とし、第1～3期までは墓標・ベンガラ散布・副葬品とも少ないが、第4期以降に多くなり、副葬品の種類・副葬率の増加と組み合わせからも、列間・列内の差異・格差が一部で顕在化する。構築労力も第1～3期までは周堤墓内への埋葬人数と比例するが、第5期では隔絶した労力が必要で、周堤墓に入る者と入らない者、周堤墓内でも世帯間の差異が相対的に広がる状況を読み取ることができる。

更に、キウス4遺跡における周堤墓外土坑墓は当初から周堤墓と併存し、第1期では同時期の周堤墓に近接していたが、第3期では祭祀の場である盛土遺構に近接するようになり、周堤墓の大型化に伴って、周堤墓外土坑墓が周堤墓から離れる傾向が認められる。

第Ⅳ部では縄文時代の埋葬儀礼と参加者数やその意味について具体的な検討を行うとともに、子供の埋葬や副葬品の有無、組み合わせだけでなく、埋葬小群での副葬品やエラボレーション(労働力の投下度合い)の高い墓の偏りを考え併せることにより、北海道における縄文時代の社会について言及し、最後に論文全体のまとめと今後の課題を記載した。

第7章では縄文時代の埋葬儀礼について検討した。早期後葉の注口土器の副葬や土坑墓上・周辺での焼土・炭化種子類の検出から、火を用い食物等を供献する埋葬儀礼の存在を想定し、後期後葉の周堤墓後半期～晩期初頭では坑口部の注口土器等の出土状況から墓の埋め戻し後に10数名程度で共飲・共食し、その後に土器を破碎して墓上に置くという埋葬儀礼を推測した。晩期中葉以降は坑口部出土が壺形土器等に代わり、坑底部土器の増加や土器内部出土品等から、食物や道具類を土器に入れ死者へ供献する儀礼に変遷したと考えた。

第8章では近年の縄文時代の階層化社会論についての研究史をまとめ、高倉による弥生時代の成層化プロセスを縄文時代に援用した山田モデルの第Ⅰ～第Ⅳ段階について、北海道の状況から更に第Ⅰ-Ⅱ段階、第Ⅱ-Ⅲ段階を加えてプロセスを次のとおり細分した。

第Ⅰ段階：単一の埋葬小群で構成される、あるいは埋葬小群が複数存在しても、装身具・副葬品が無い、もしくは些少である等質的な墓地・墓域の段階。

第Ⅰ-Ⅱ段階：埋葬小群が複数存在し、副葬品も多いが、稀少性や付加価値の高いものが少なく、等質的な墓地・墓域の段階。

第Ⅱ段階：埋葬小群が複数存在し、共同墓地的様相をもちつつ、特定の個人墓に稀少性や付加価値の高いものがあるが、埋葬小群間の差異が無い段階。特定個人が発現する。

第Ⅱ-Ⅲ段階：埋葬小群が複数存在し、特定の埋葬小群に稀少性や付加価値の高いものが多くあり、装身具・副葬品の保有状況にも差異が存在するが、埋葬施設に対するエラボレーション(労働力の投下度合い)の高いものが無い段階。特定の集団が浮上しつつも、他集団との差異が少ない状態。

第Ⅲ段階：埋葬小群が複数存在し、特定の埋葬小群に埋葬施設に対するエラボレーション(労働力の投下度合い)の高いもの、稀少性や付加価値の高いものが集中する段階。装身具・副葬品の保有状況にも大きな差異が存在し、特定の集団が浮上する。

第Ⅳ段階：先の状況を踏まえて、墓域内から特定の埋葬小群が外に出る、あるいは特定埋葬小群から特定個人達が飛び出す段階。特定集団が突出し、エリート層が析出する。

その上で、副葬品の質や量だけでなく、個人の社会的地位が表現される傾向のある墓の上部構造を主な指標として、第Ⅲ段階以降のエラボレーション(労働力の投下度合い)の高い墓が特定の埋葬小群にまとまり、他の埋葬小群と区分されているか、またそれが継続しているか、子供の埋葬から地位が世襲されているかを主な観点として、北海道における縄文社会の階層化について検討することを目的として示した。

最初に、子供の埋葬について検討した。縄文後期中葉・後葉の新生児期～小児へのヒスイ玉等

の稀少財副葬、晩期後葉～続縄文初頭の主に小児への多種多様な副葬品で子供間格差が見られ、職能の継承、生業への参加や関連する技能習得開始年齢等が読み取れるが、社会的・経済的不平等の世襲は確認できないと考えた。

次に、後期中葉～晩期末葉・続縄文初頭にかけての主な道央部の遺跡における副葬品の有無、組み合わせと埋葬小群での副葬品やエラボレーション（労働力の投下度合い）の高い墓の偏りから、北海道における縄文時代の社会について本論のモデルを適用した。更に、松木が「生産活動、宗教儀礼、外の世界との交渉など、それぞれ異なった社会的役割で頂点に立つ、さまざまなタイプの重要人物が併存して活躍する。墓の副葬品も、役割に応じて種類が異なり、その数の多少が序列を示していたと考えられる」と定義したヘテラルキー社会が縄文時代の北海道において認められるかについて検討した。

その結果、北海道における縄文時代の社会は次のとおりと考えた。

1. 後期中葉は縄文時代葬墓制の大きな画期の一つで、遺跡により副葬品や副葬率に差異が認められるが、第Ⅰ段階、第Ⅰ・Ⅱ段階、第Ⅱ段階に相当する等質的な墓地・埋葬小群
2. 後期後葉の周堤墓第1～3期は第Ⅱ段階に相当し、後期中葉と同様に埋葬小群間の関係は等質に近い
3. 後期後葉の周堤墓第4・5期は副葬品が増加し、埋葬小群間で工具・狩猟具・祭祀具の副葬品の偏りがあることから、第Ⅱ・Ⅲ段階と想定され、それぞれの職能代表が併存し、特定の社会的場面における多頭的序列のあるヘテラルキー社会
4. 周堤墓に併行・後続する後期後葉の三ッ谷式・御殿山式期はエラボレーション（労働力の投下度合い）の高い墓の存在と一定区域へまとまる傾向から、第Ⅲ段階に相当し、石棒・サメ歯・漆製品・玉類の副葬から、呪術者が一時的に突出した階層化傾向の社会
5. 晩期前葉はエラボレーション（労働力の投下度合い）の高い墓は無くなり、多様な副葬品の組み合わせがある遺跡と副葬品の少ない遺跡があるが呪術者の突出は見出せず、中葉・後葉に見られる規格化され大量に作製された副葬用の石鏃やコハク玉等が副葬された多副葬墓も墓地内での位置や規模等で隔絶した存在では無く、副葬品が多い遺跡では呪術者的性格も併せ持つ狩猟者等の職能代表と呪術者の並立、副葬品が少ない遺跡では狩猟者・呪術者的要素が確認できることから、第Ⅱ・Ⅲ段階とした周堤墓第4・5期の状況に近いヘテラルキー社会
6. 晩期末葉～続縄文初頭は狩猟具の増加と単独あるいは組み合わせの副葬や副葬用石鏃の出現から狩猟者的要素が強く、一部遺跡でのコハク玉と石鏃等が副葬された墓の隣接から、呪術者と狩猟者の職能統合者が次第に浮かび上がる状況

その上で、このような縄文社会の模式図を示した。

第9章では北海道における縄文時代の葬墓制について時期別・埋葬方法別にまとめ、今後の残された課題を指摘した。